

猫の変容

—夏目漱石の『吾輩は猫である』最終章を読む—

小川 敏 栄*

吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑ふものがあるかも知れんが、此位な事は猫にとつて何でもない。吾輩は是で読心術を心得て居る。（第九章）

△猫の癖に▽、△是で▽という言い方に注意しよう。「吾輩」は人間が猫を見下す視線をつねに意識している。△此位な事は猫にとつて何でもない▽とあるように、それをひっくり返して見せたのが『吾輩は猫である』という作品の面白さであるが、最初猫は人間の心が読めなかつたはずだ。

第九章は『ホトトギス』明治三十九年三月号に発表された。第一章が読み切りとして掲載されてから一年二ヶ月経っている。第九章の翌日の出来事を述べる第十章は翌月の掲載、それから四ヶ月後発表の第十一章をもつて連載終了となる。

最終章を読んで、一年半の間に猫がどう変わったかを見ることにしたい。（テキストには一九九三年刊の岩波書店版『漱石全集』第一巻を使用した。）

床の間の前に碁盤を中に据ゑて迷亭君と独仙君が対坐して居る。

第十一章の冒頭である。どこからか座敷に戻ってきた猫の目に映じた二人は、珍しく遊びに興じようとしている。囲碁は隠士めいた独仙にお似合いだが、あの迷亭がおとなしく碁を打つはずがない。猫の期待は裏切られない。なにしろ迷亭は先手黒番も定石初歩もご存知ないのだ。

囲碁について猫の感想を聞こう。

吾輩は世間が狭いから碁盤と云ふものは近来になつて始めて拝見したのだが、考へれば考へる程妙に出来て居る。広くもない四角な板を狭苦しく四角に仕切つて、目が眩む程ごとくと黒白の石をならべる。さうして勝つたとか、負けたとか、死んだとか、生きたとか、あぶら汗を流して騒いで居る。高が一尺四方位の面積だ。猫の前足で掻き散らしても滅茶々々になる。引き寄せて結べば草の庵にて、解ければもとの野原なりけり。入らざるいたづらだ。懐手をしして盤を眺めて居る方が遥かに気楽である。

*おがわ・としえい、埼玉大学教養学部教授、比較文学

△始めて拝見した▽というところが肝心で、第七章の銭湯の観察がよい例だが、人間だったら普通問題としないものについて、疑問を覚え、何かの意味を見出す。これが猫たるものの視線である。新しい材料が得られたということで、例によって猫は批評をする。囲碁は結局△入らざるいたずらだ▽と一言で片付けるのだが、△猫の前足で掻き散らしても滅茶々々になる▽と言う個所は、実際の猫の行動を彷彿させて、楽しい。

次に猫は碁石の気持ちになつてみる。

夫も最初の三四十目は、石の並べ方では別段目障りにもならないが、いざ天下わけ目と云ふ間に覗いて見ると、いやはや御気の毒な有様だ。白と黒が盤から、こぼれ落ちる迄に押し合つて、御互にギュー／＼云つて居る。窮窟だからと云つて、隣りの奴にどいて貰ふ訳にも行かず、邪魔だと申して前の先生に退去を命ずる権利もなし、天命とあきらめて、ちつとして身動きもせず、すくんで居るより外に、どうする事も出来ない。

このあたりの書き方は、猫が銭湯の窓から、自分の主人が湯船の隅に押しつけられて真つ赤になつてすくんでいるのを覗き見た個所を思い出させ、心理的にも空間的にも群れることを嫌う猫の本領を發揮していると言ふべきだろう。猫はさらに続ける。

碁を発明したものは人間で、人間の嗜好が局面にあらはれるものとするれば、窮窟なる碁石の運命は、せゝこましい人間の性質を代表し

て居ると云つても差支ない。人間の性質が碁石の運命で推知する事が出来るものとすれば、人間とは天空海潤の世界を、我からと縮めて、己れの立つ両足以外には、どうあつても踏み出せぬ様に小刀細工で自分の領分に縄張りをするのが好きなんだと断言せざるを得ない。人間とは強ひて苦痛を求めるものであると一言に評してもよからう。

私たちは似たような猫の意見を聞いたことがある。第四章は△例によつて金田邸へ忍び込む▽という一行で始まつていたが、そこで猫は「忍び込む」という表現には語弊があるとして、そもそも人間が土地を所有することの非をならし、一步譲つて所有を認めるにしても△他の出入を禁ずる理由はあるまい▽と主張する。しかし現実には所有者が暴力で禁ずるので「忍び込む」という形にならざるを得ない、というのだ。

縄張りとは所有を明らかにするものだが、他者も同様に縄を張り、結果として相互の出入りができず、△御互にギュー／＼云つて居る▽のが人間だ、ということになる。実はここには単純化があつて、実際の人間世界を構成する人間は、碁石のように同じ大きさではない。金田のように金の力で膨張して隣の人間をはじき飛ばそうという者がいるのが現実だ。これが、これまで苦沙弥たち「太平の逸民」が金田家との関係で知らされた世の中の姿だ。むろん猫はそのことを知っているが、今は囲碁の意味するものについてしか語らぬということだろう。

囲碁という材料は新しかった。しかし、それについて言われたことは、以前の言の、形を変えた繰り返しであつた。△懐手をして盤を眺めて居る▽気楽さのせいでもあるまいが、猫の視線は新鮮味を失つて

いる。

二

床の間の前で迷亭君と独仙君が一生懸命に輸贏を争つて居ると、座敷の入口には、寒月君と東風君が相ならんで其傍に主人が黄色い顔をして坐つてゐる。寒月君の前に鯉節が三本、裸の儘畳の上に行儀よく排列してあるのは奇観である。

「座敷の入口に裸の鯉節三本を中に挟んで主人と寒月君と東風君が鼎坐して居る。」と書けば、章の冒頭の構図との類似が鮮明になる。碁盤の代わりに鯉節三本というのが滑稽である。それにしても、奇観というなら、裸の鯉節を前にして奇観を愛でている猫を見る方が奇観であらう。

猫はついに鯉節に食指を動かさない。鯉節が船で鼠に囓られようと主人に無意味に臭いをかかれようと我関せず焉という態度である。猫は目と耳の存在に徹し、猫としての特性である食い気をどこかへ置き忘れてしまっている。

かつてはそうではなかった。寒月の食い切つた蒲鉾の残りを頂戴したこともあつたし、雑煮を食べて家の者皆の前で踊りを踊つたこともあつた。銭湯から帰つて夕食をとる主人のそばに控えて残り物を待つたこともある。基本的に猫の関心と行動は、第七章の「運動」を除けば、昼寝と人間の観察以外には飲食しかなかったはずだ。何やら今までの「吾輩」と違つた猫を見る印象がある。

三

鯉節は四日前に国から戻つた寒月の土産である。船の中で鯉節と一緒にヴァイオリンも鼠に囓られたという話から、東風がヴァイオリンを習いたいと言い出し、寒月が請われて、ヴァイオリンを習い始めた顛末を話し始める。その際、苦沙弥に許可をとつて居るのは、ことさらに苦沙弥を立てているようで妙だが、それなりに理由のあることがやがてわかる。

独仙と迷亭の勝負はまだ終わっていないが、旗色の悪そうな迷亭は、ヴァイオリン話の方が面白そうだと見てとつて、横合いから寒月の話に茶々を入れる。

このヴァイオリン話が長い。ただ長いのではなく、同じ行為の繰り返しが同じ言葉で語られるので、聞く者はいらいらしてくる。面倒になつた苦沙弥は書齋から古ぼけた洋書を持ち出して、腹這いになつて読み始めるし、一応迷亭に勝つて聴き手に加わつた独仙も、あらためて一人で碁盤に向かう始末。聞いているのは、八長い事にかつて辟易した事のない迷亭と素直に寒月を尊敬する東風のみ。なんだか落語の「寝床」を思わせる展開である。

しかるにヴァイオリン話は、ようやく手に入れたヴァイオリンを寒月が夜、庚申山に登つて一枚岩に坐り、いよいよ弾こうとした時、八突然後ろの古沼の奥でギヤーと云ふ声がしたため、驚いて山を駆け下りて宿の布団にぐるまって寝た、というところで突然、終わる。話はヴァイオリンを弾くところまで行っていない。寒月には初めからそのつもりがなかったらしい。

東風は「何だか君の話は物足りない様な気がする」と言った。当たり前である。聞き手の期待を完全にはぐらかしているからだ。寒月が「大得意の容子」とのは、怪談を語り終えた満足感からだろうか。迷亭は狸に化かされた滑稽譚と見て、その手前までが美音を期待させただけに「嘸遺憾だらう」と一人で合点する。寒月は「そんなに遺憾ではありません」と思ひのほか平気である。

誰でも気づくのは、この庚申山事件と、第二章で「感応の恋愛」として語られた吾妻橋事件の類似である。夜遅くヴァイオリンを携えて水のはとりにいる寒月に聞こえてくる声。その直前の尋常ならざる心の状態。聞こえた声はまったく異なり、寒月の反応も正反對だけれども、そこには同種の状況と現象がある。私たちはこうした事件の根本にあるものとして寒月の聴覚の特殊性を考えるべきかもしれない。彼は店頭に吊されたヴァイオリンの「そら音」に身を焦がしたり、△山の中へ迷ひ込んだ様な心持ちになる▽（第十章）深夜の上野公園で、動物園から聞こえる虎の鳴き声の物凄さを愛でたりする男である。あの△ギヤールと云ふ声▽をクライマックスとする体験をその後のヴァイオリン独習の原点と位置づけることは、彼の一風変わった感覚をもつてすれば、ありえないことではない。

寒月のヴァイオリン話が終わって、迷亭が△そりや、さうと寒月君、近頃でも矢張り学校へ行つて珠許り磨いてるのかね▽と話題を変え、寒月は、珠磨きはやめようと思つて居ること、郷里で結婚したことを話す。

ここで、この章の初めの二つの謎が解ける。一つは、寒月の帰郷が結婚のためであつたらしいこと、二つは、鯉節が結婚祝いに親類から貰つたものであつたことである。つまり寒月の今日の訪れの目的は結

婚報告であつたわけなのだが、それを今まで言わずにヴァイオリン話をここまで引つ張つたのである。

陰の極たる庚申山事件を語ることは、寒月が意図したかどうかはともかく、寒月の結婚という予想外の報告を聞く者の耳に、陽の極たる吾妻橋事件を中和するものとして働き、「感応の恋愛」を無に帰する役割を果たしていた、と見ることが出来る。

四

寒月が結婚したことについての情報が「探偵」によつて既に金田家に知らされているだろうという寒月の発言を受けて、苦沙弥が、△探偵と云ふ奴はスリ、泥棒、強盗の一族で到底人の風上に置けるものではない▽と述べる。独仙が二十世紀の人間の探偵化傾向の理由を問うと、△夫は僕が大分考へた事だ。▽と前置きして、△僕の解釈によると当世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるのが原因になつてゐる。▽という持論を述べる。

「今の人の自覚心と云ふのは自己と他人の間に截然たる利害の鴻溝があると云ふ事を知り過ぎて居ると云ふ事だ。さうして此自覚心なるものは文明が進むに従つて一日／＼と鋭敏になつて行くから、仕舞には一挙手一投足も自然天然とは出来ない様になる。（中略）寝てもおれ、覚めてもおれ、此おれが至る所につけまはつて居るから、人間の行為言動が人工的にコセつく許り、自分で窮窟になる許り、世の中が苦しくなる許り、丁度見合をする若い男女の心持ちで朝から晩迄くらさなければならぬ。（以下略）」

キーワードは「窮窟」であろう。それは「自然」の反対概念であり、囲碁についての感想で猫が嫌っていたところのものだ。

そういう時代だから人間は神経衰弱になる。△神経衰弱の国民には生きて居る事が死よりも甚しき苦痛である▽から人間はみな自殺すると苦沙弥が予言し、それをさらに誇張した迷亭の未来記が語られる。それによれば結婚は不可能となり、芸術は滅びる。

東風はこれに反対し、寒月もこうした厭世説を聞いても何とも感じないと言う。寒月の反応を、△そりや妻君を持ち立てだからさ▽と迷亭がすぐ解釈し、それを受けて今度は苦沙弥が、△女のわるい事▽について西洋の賢人の言を次々と引用する。さすがの寒月もその勢いに抗しかねたところで、多々良三平が闖入して金田家の令嬢との婚約を伝える。三平持参の前祝いのビールが抜かれる。

三平は皆を結婚の披露会に招待するが、主人は式への出席を固辞する。独仙も出席する意思はなさそうだ。喜んで行くという迷亭は面白がっているだけのようにだし、東風と寒月は新郎新婦の幸せを願うよりも、結婚披露会で自分たちの詩と曲を発表することの方に関心を寄せているように見える。各人の思いはバラバラで、大団円のめでたさは感じられない。三平のみ愉快がって、自分で買ってきたビールを一人でぐいぐい飲んで真っ赤になる。日も暮れて、やがて客人たちは帰る。

呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。

主人が夕飯を済まして書斎に入り、家が静かになったあとに漏らし

た猫の思いである。金田嬢の縁談をめぐる騒ぎが丸く収まったというのに猫の気が晴れない理由は、祝いのビールを苦い思いで飲んだはずの主人の気持ちを猫が知っていたこともあるが、それだけではない。

主人は早晩胃病で死ぬ。金田のちいさんは慾でもう死んで居る。秋の木の葉は大概落ち尽した。死ぬのが万物の定業で、生きてゐてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬ丈が賢いのかも知れない。諸先生の説に従へば人間の運命は自殺に帰するさうだ。油断をすると猫もそんな窮窟な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさくさして来た。三平君のビールでも飲んでちと景気をつけてやらう。

三平は△黄色い顔をして坐つてゐる▽主人を胃病の治らないせいと見た。△生きてゐてもあんまり役に立たない▽というのは、猫が、最近幽霊になつて現れた△カーテル、ムルと云ふ見ず知らずの同族▽に比して△碌でなし▽と見る自分のことだ。

主人は死ぬ。自分は碌でなし。将来は窮屈な世。こう並べれば△八気がくさくさして▽くるのもつともである。かくして猫は、△舌の先を針でさゝれた様にびりゝ▽とくる、△腐つたもの▽としか思えないビールを無理して飲んだ。

酔つて脚を踏み外し、庭の甕の水に落ちた猫は、ひとしきり足掻いたのち、四肢の力を抜いて、成り行きを自然に任せる。猫は、助かる可能性のないことを見とり、無駄な努力を諦めたのだが、その頭には先の厭世的な思いも浮かんでいたはずだ。

五

猫の特徴は、犬と違い、主人に全面的に従うことのないこととされる。猫は主人を批判する部分を持ち、それが猫のレゾネートルとなる。

ところが最終章で、猫の批判的視点が独自のものとして機能しなくなったことが明らかになった。囲碁の場での人間批評は、後半の苦沙弥たちの現代の人間に対する批判と重なり、猫ならではのものではなくなっている。しかも最後は猫が苦沙弥たちの考えに同調して、暗い気持ちに追い込まれる。

苦沙弥たちが人間について猫的視点をもつにいたったのなら、猫の存在はもはや不要であろう。その時ちようにどお詠え向きにハカーテル、ムルVなる者も現れたので、猫は自分の退場の潮時だと言うことができたのだ。

猫の特徴をもう一つあげれば、いつも食い気をもつことである。ところが最終章の猫は違う。大好物の鰹節にまったく興味を示さない。それどころか、苦いビールを無理して飲む。これは猫たるものの行動ではない。

二つの特徴の消滅は、猫が猫ではなくなったということである。もはや猫であることをやめた猫に思い残すことはなかったと信じた。